

川辺川ダム建設をめぐる欺瞞

意見を述べる根拠

事業認定の要件 二十条の二
起業者が当該事業を遂行する充分な意思と
能力を有するものであること

国家公務員倫理法

職員が遵守すべき職務に係る倫理原則

第3条 職員は、国民全体の奉仕者であり、国民の一部に対してのみの奉仕者ではないことを自覚し、職務上知り得た情報について国民の一部に対してのみ有利な取扱いをする等国民に対し不当な差別的取扱いをしてはならず、**常に公正な職務の執行に当たらなければならない。**

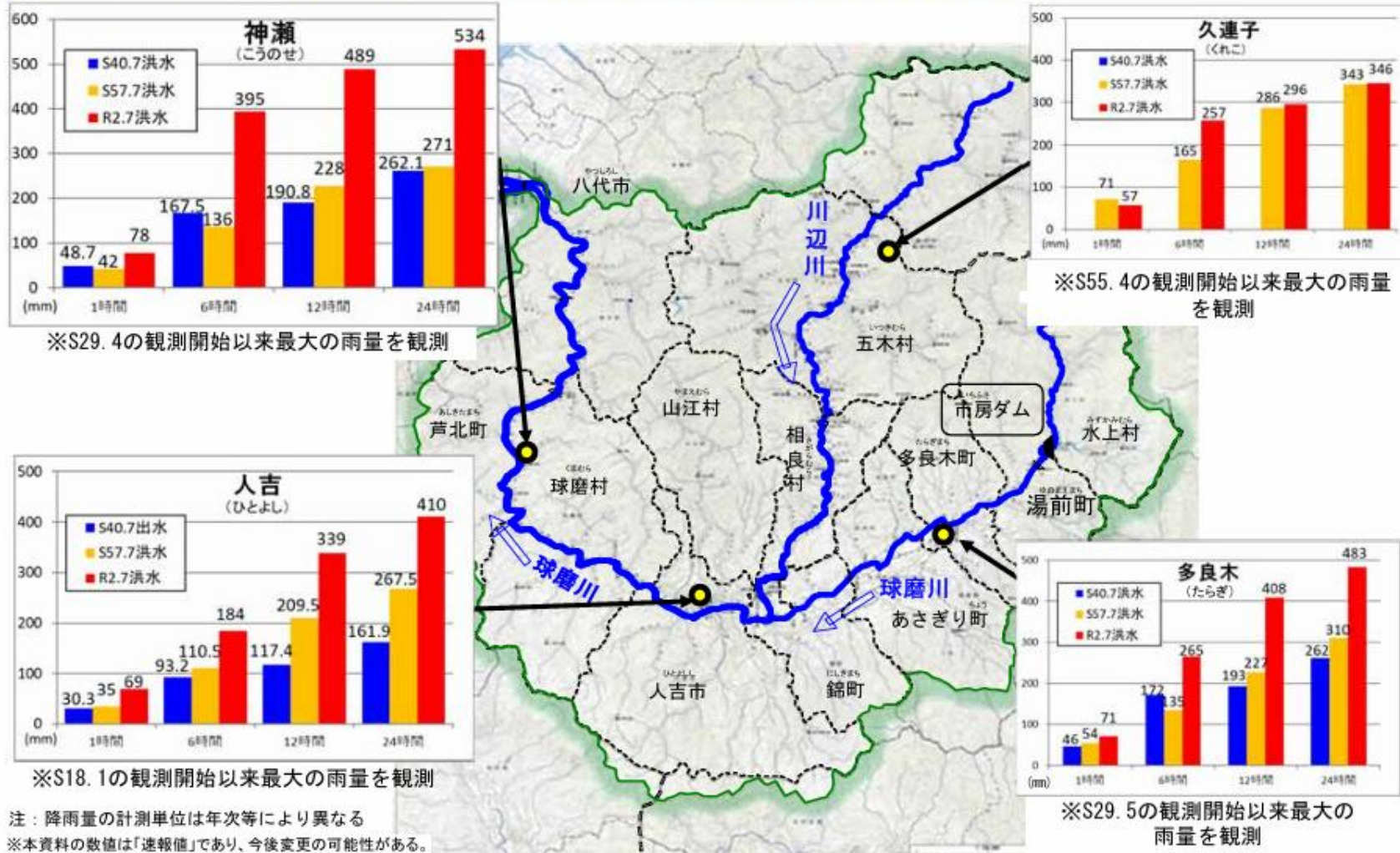
さて、川辺川流水型ダム建設事業の起業者である国土交通省職員が公正公明に事業を遂行しているのか、十分な意思と**能力を有するものであるのか**についてこれまでの事例を基に検証を行いたい。同時に本事業が公益性を有するか否かについても論証する

Q2. 令和2年7月豪雨の検証は行ったのでしょうか。

- 令和2年7月豪雨発生直後に「将来に向かって球磨川流域住民が生命の危険に晒されることなく、安全・安心な生活がくれるよう、国、県、流域12市町村が連携し、令和2年7月球磨川豪雨災害に関する検証を行うこと」を目的として、令和2年7月球磨川豪雨検証委員会を設置し、第1回委員会（令和2年8月25日）、第2回委員会（令和2年10月6日）において、以下の事項を検証しました。
 - ・ 令和2年7月豪雨の概要について
【気象概要、観測雨量、観測水位】
 - ・ 令和2年7月豪雨の被害状況について
【家屋被害、施設被害、人的被害】
 - ・ 浸水範囲と氾濫形態について
 - ・ 洪水流量の推定について
 - ・ 市房ダム等における洪水調節について
【利水ダムの事前放流、市房ダムの操作と効果】
 - ・ 「ダムによらない治水を検討する場」での治水対策について
 - ・ 「ダムによらない治水を検討する場」でのソフト対策について
 - ・ 「球磨川治水対策協議会」で検討していた治水対策について
 - ・ 仮に川辺川ダムが存在した場合の効果について
 - ・ 初動対応について
- 検証にあたっては、客観的な事実を確認するとともに、国、県、流域市町村が保有するデータなどを基に、科学的に検証を行いました。
- また、被害が甚大であった人吉市、球磨村、芦北町、八代市坂本町、相良村、山江村の23地区26人の住民の方々にヒアリングを実施しており、千寿園で亡くなられた方々の状況もお聴きしています。
- 令和2年7月豪雨の検証については、国土交通省八代河川国道事務所のホームページ「[令和2年7月球磨川豪雨検証委員会](#)」に掲載しています。

国交省資料

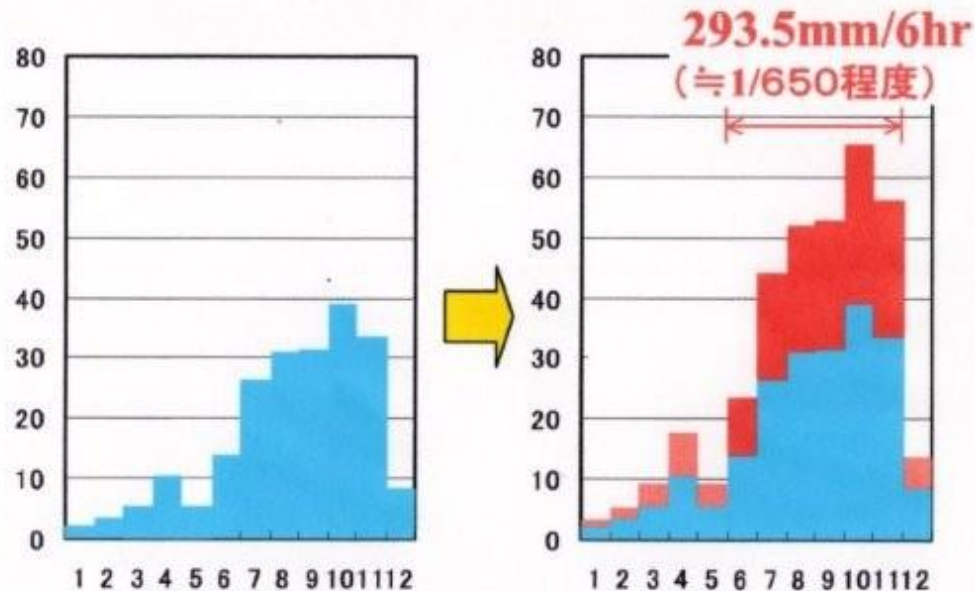
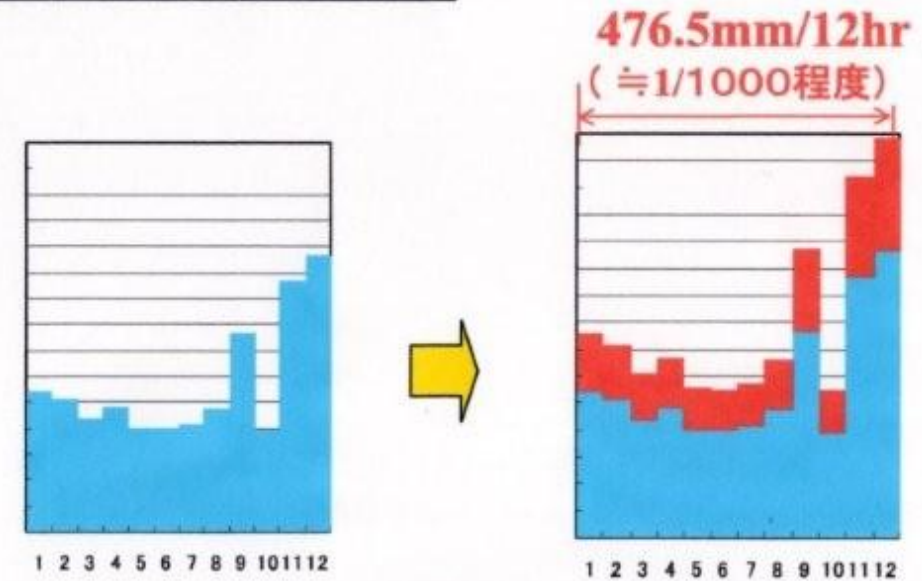
○球磨川本川の中流部から上流部及び最大支川の川辺川の各雨量観測所における降雨量は、6時間雨量、12時間雨量及び24時間雨量において、戦後最大の洪水被害をもたらした昭和40年7月洪水や昭和57年7月洪水を上回る降雨を記録した。



異常降雨のチェックの考え方

実績降雨群の降雨量を計画降雨量に引き伸ばすにあたり、降雨の**時間分布**及び**地域分布**に著しく不合理を生ずる場合は、計画対象降雨から除外している。

1. 短時間に降雨群が集中する場合
2. 一部地域に降雨が著しく集中する場合



短時間に降雨が集中する
(H10.10型)

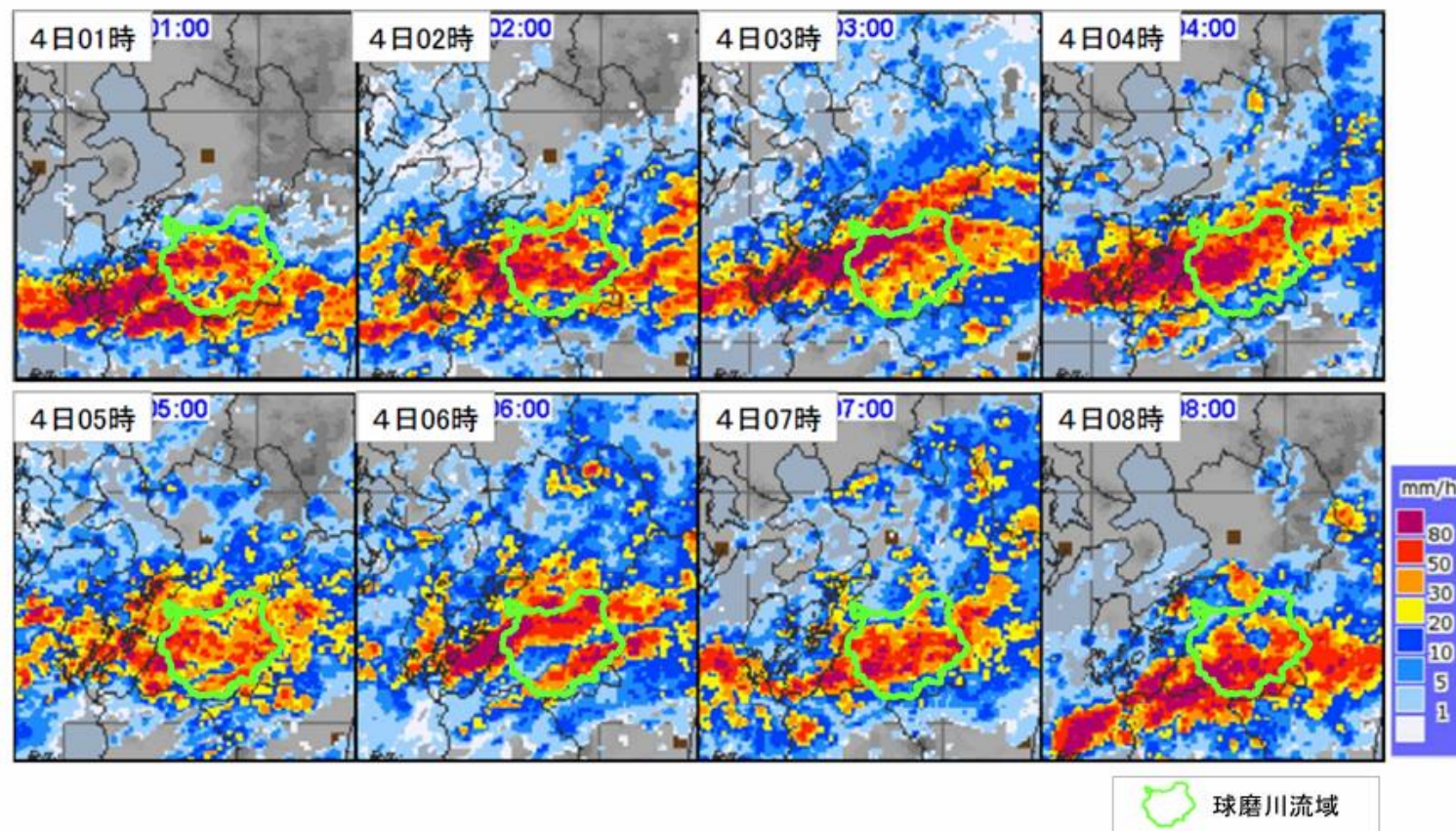


一部地域に降雨が著しく集中する
(S36.10型)

1. 令和2年7月豪雨の概要(気象概要)

3

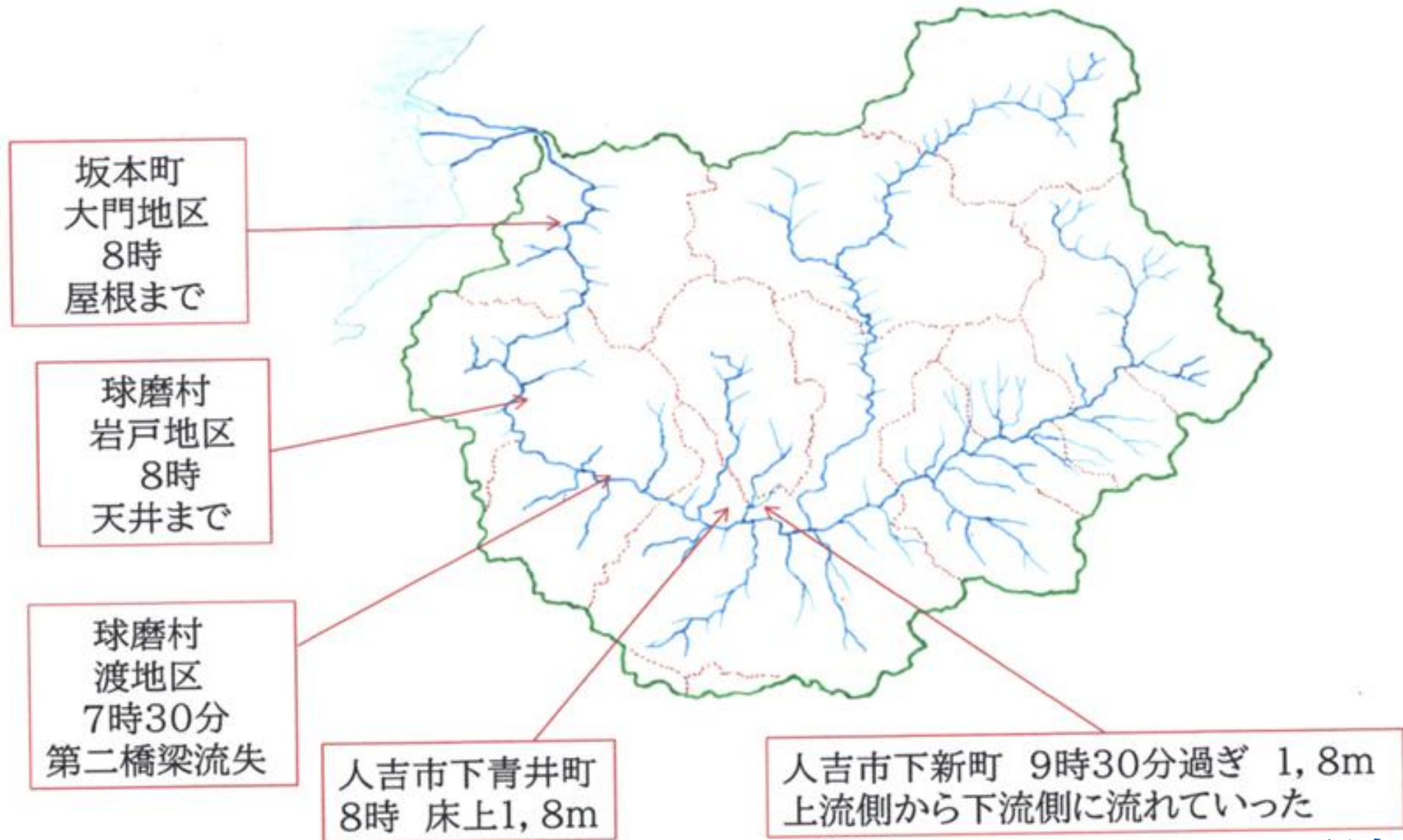
○球磨川流域では線状降水帯が形成され、時間雨量30mmを超える激しい雨が、7月4日未明から朝にかけて、8時間にわたって連続して降り続いた。



「熊本地方気象台 災害時気象資料」より抜粋及び一部加筆

※本資料の数値は「速報値」であり、今後変更の可能性がある。

危険な洪水や氾濫が発生した時刻



3:39 記録的短時間大雨情報発表
球磨村付近で110ミリの豪雨

村道不通 (R4年6月現在)

大岩 6:31 住宅流出

大槻 1:00~7:00までの6時間で370mmの豪雨
※7時以降は欠測のため記録なし

2:30土石流発生
伊高瀬

四蔵 4:00 県道冠水
6:00 永椎橋流出

木屋角 2:00 消防ポンプによる排水開始
4:10 谷水が国道を流れ車が浮上

高沢 3:40 集落内県道冠水
5:50 車や家財の流出
6:30 住宅流出

県道不通 (R4年6月現在)

境目

浦野 4:00 県道冠水

3:00 糸原橋越水 村道冠水
5:00 糸原橋流出
糸原

球磨川

球磨村

球磨村役場

千寿園

鬼ノ口の棚田

「令和2年7月豪雨災害 記憶と検証」熊本県球磨村 より抜粋し Google Map に配置

支流の氾濫について

2. 流量の推定について(再現計算の妥当性確認:山田川周辺の浸水形態の分析) 10

- 山田川からの氾濫水が住宅地へ激しく流入すると共に、球磨川の氾濫開始も確認され、青井阿蘇神社付近等での急激な水位上昇も確認される。
- 推定される浸水深は九日町で約2m程度、球磨川の氾濫開始までの暫くの間は同水位で一旦止まったとの証言あり。

午前7:00～8:00の状況

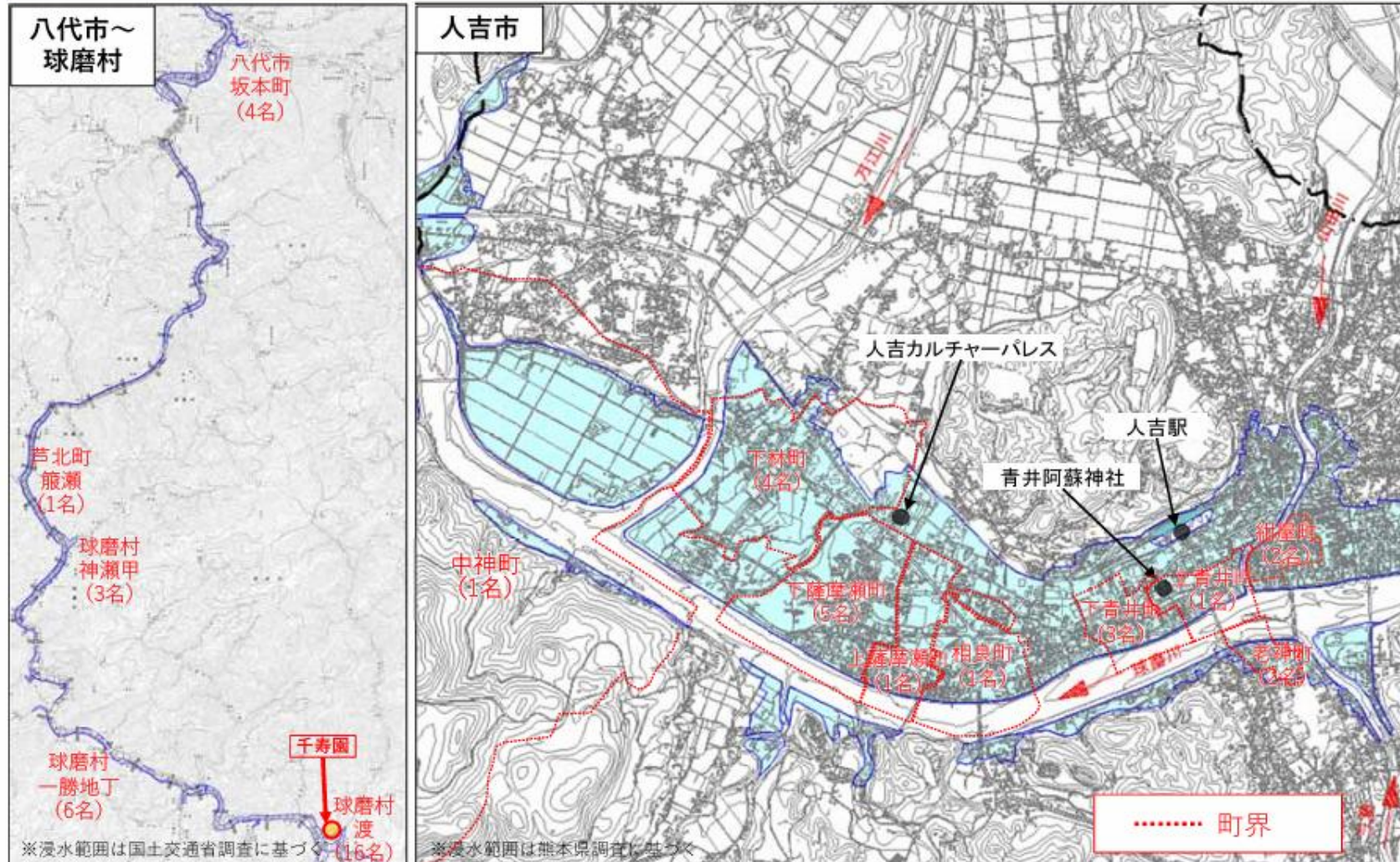
※熊本県で浸水形態調査を実施(8～9月)



○球磨川流域の犠牲者(50名)の発生場所の状況※については下図のとおり。

○人吉市の犠牲者(20名)は、概ね浸水範囲と一致し、浸水範囲が広い右岸側に集中している。

※発生場所については、熊本県災害対策本部会議資料(熊本県警察本部提供資料)の「住所」に基づき集計したものを記載。



※被害内容については、今後、変わる可能性があります。

Q4-2 支川で発生したバックウォーター現象について教えてください。

- 支川で起きるバックウォーター現象は、支川が流れ込む先の本川の水位が高くなり、その影響を受け、本川に合流しにくくなった支川の水位が高くなる現象です。

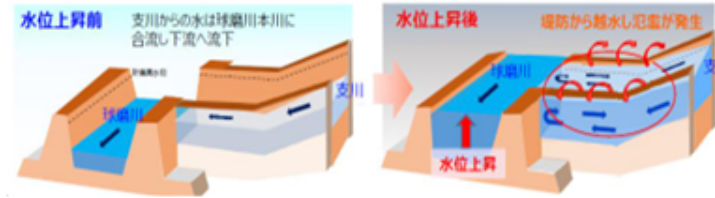


図 バックウォーター現象のイメージ

- 令和2年7月豪雨では、山田川等の支川においては、球磨川本川の水位上昇に伴い、支川の水位の縦断勾配が緩くなり、支川の水位が上昇したため、球磨川本川より早く、支川の合流点より上流の区間から越水が発生していたものと推定しています。
- なお、この現象については、球磨川水系河川整備計画の策定にあたり、「球磨川水系学識者懇談会」において、改めて専門的観点から確認をいただいています。

紺屋町 つばめタクシー前 監視カメラ映像より



6:39 北からも水がくる
6:43 北から来た水が優勢となり
南の九日町方面へと向かっている



7:50 店の軒下まで増水
8:02 カメラ水没

手渡す会資料



山田川 五十鈴橋に引っ掛かった草木

○ 令和2年7月豪雨は、球磨川流域の全域でこれまでにない記録的な豪雨となり、川辺川流域において観測史上最大の雨量を観測しました。水位についても、川辺川の柳瀬観測所において観測開始以来最高水位を記録しています。

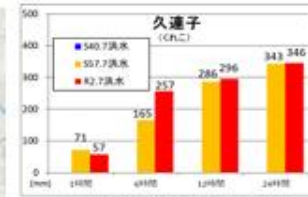
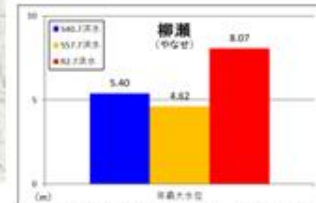


図 令和2年7月豪雨時の川辺川流域
九連子雨量観測所の観測雨量



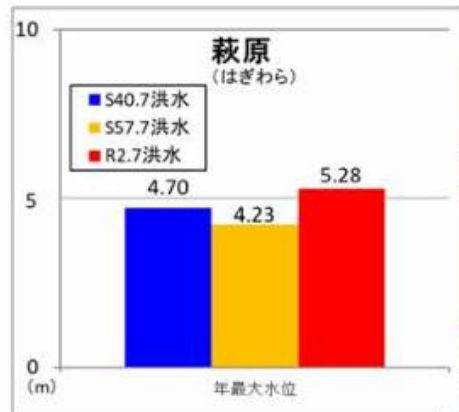
国 令和2年7月豪雨時の川辺川
柳瀬水位観測所の観測水位

流量について

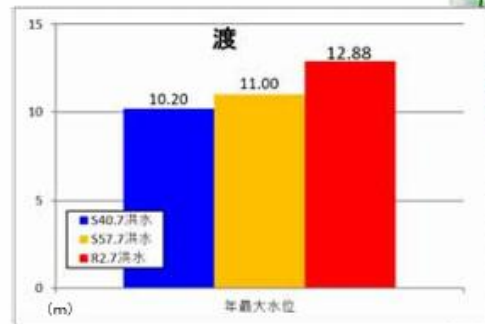
1. 令和2年7月豪雨の概要(国管理区間の観測水位)

8

○球磨川本川の下流部から中上流部及び支川川辺川(国管理区間)の各水位観測所において、戦後最大の洪水被害をもたらした昭和40年7月洪水や昭和57年7月洪水を上回る水位を記録し、萩原、渡、人吉、柳瀬のいずれも観測開始以来最高水位を記録した。



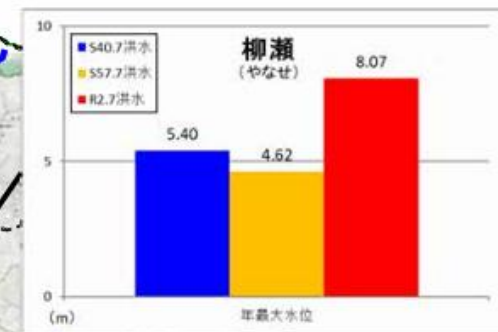
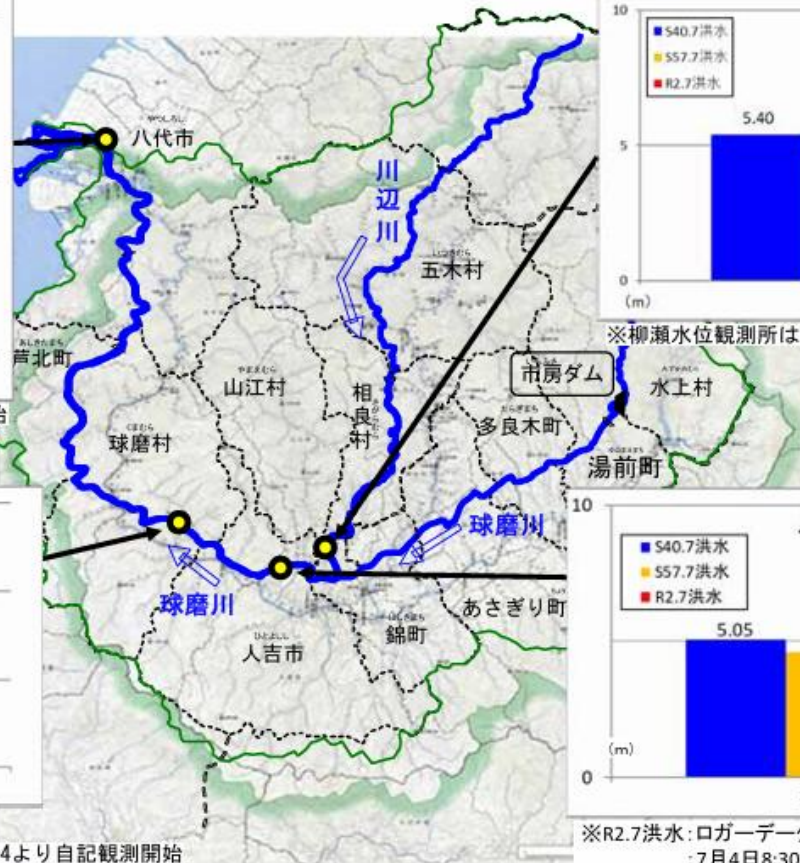
※萩原水位観測所は、S29.5より自記観測開始



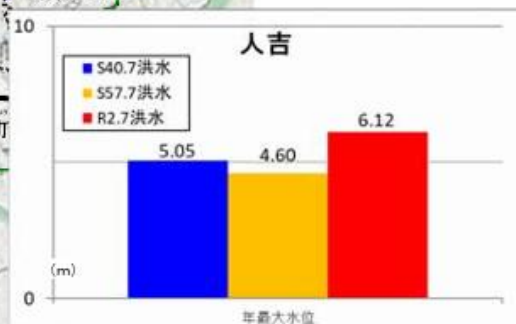
※R2.7洪水: 7月4日7:30以降欠測

※渡水位観測所のS40.7は普通観測値。S54.4より自記観測開始

※本資料の数値は「速報値」であり、今後変更の可能性がある。



※柳瀬水位観測所は、S26.7より自記観測開始



※R2.7洪水: ロガーデータにより水位を補完

: 7月4日8:30以降欠測

※人吉水位観測所は、S26.11より自記観測開始

川と共に暮らしている流域住民の科学の目 II 二つの吊り橋が見ていた



藤田の吊り橋



四浦地区深水の吊り橋

国交省は大洪水が出たと強調しているが、低い位置に架けられた古びた吊り橋はごみ一つ引っ掛かることもなく無傷のままであった。川辺川に大洪水など発生していなかったのだ

球磨川・川辺川の観測地点

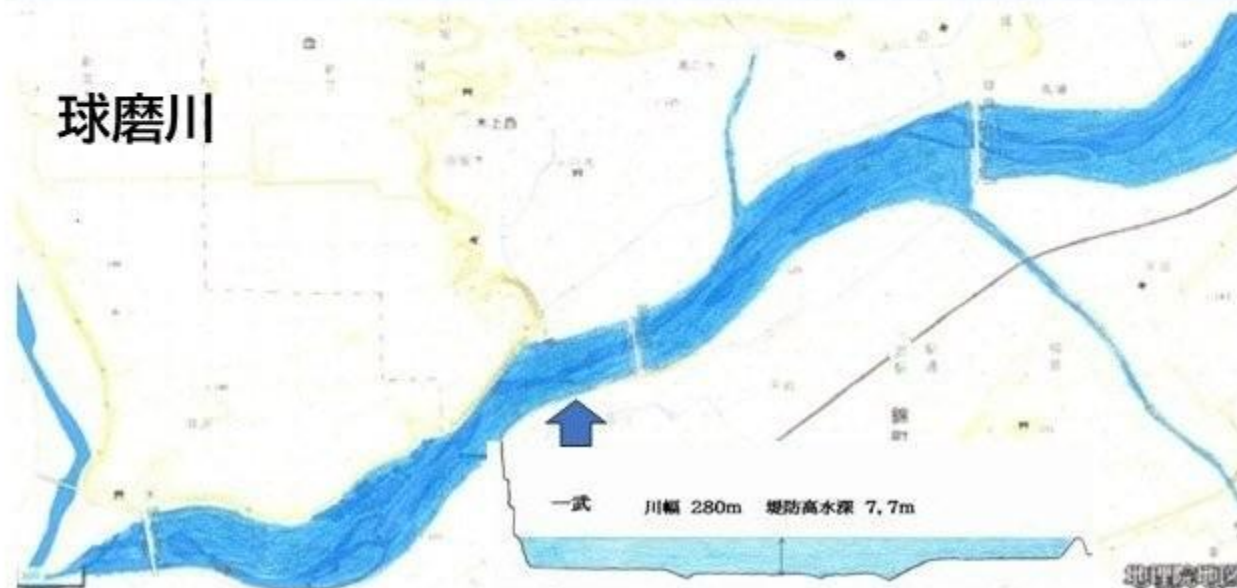


球磨川・川辺川の川幅

手渡す会資料



柳瀬地区の川辺川と一武地区の球磨川の比較



ダム化した橋梁が
耐えられなくなり流失

球磨川第四橋梁

人吉市大橋地点
水位計水没



水位計の位置

人吉市九日町
7月4日 10:19

手渡す会資料

国による令和二年七月豪雨の
河川の流量算定は
恣意的で根拠がない

環境アセスのいいかげんさ

アセスの範囲

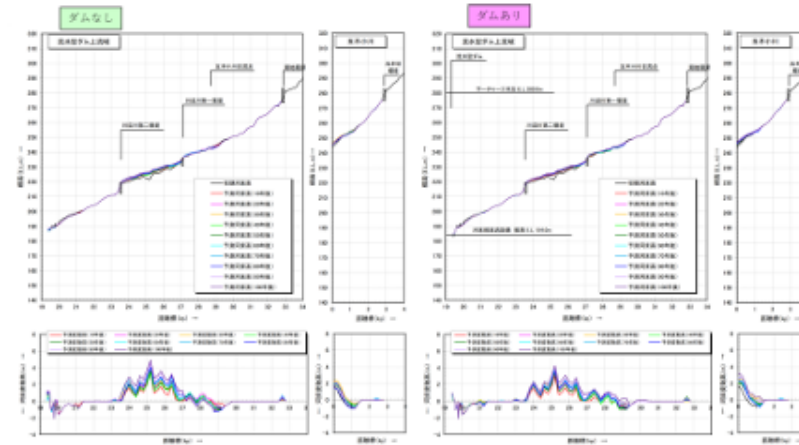
調査の対象とした範囲は、流域界等の地域的特性を踏まえ、事業実施区域を含む範囲として、球磨川の渡地点とした。

(国交省資料要約書3/1)

Q33. ダム供用後の洪水調節により、洪水調節地内や支川合流部に土砂が堆積することはないのでしょうか。

- 洪水調節に伴う一時的な冠水における土砂の堆積については、支川合流地点付近の川辺川において、ダム建設前（ダムなし）とダム建設後（ダムあり）とで河床高の経時変化に大きな差は生じないと予測していますが、洪水調節地内の河道の一部区間に土砂が堆積することが考えられます。
- 洪水調節地内の河道の一部区間に堆積した土砂は次期出水で掃流されますが、河岸には堆積した土砂の一部が残る可能性があります。そのため、環境保全措置以外の事業者による取組みとして「ダム洪水調節地及びダム下流河川の監視とその結果への対応」を実施します。
- なお、堆積土砂への対応を踏まえた維持管理計画を作成のうえ、土砂の堆積による環境影響の程度が著しいことが明らかになった場合には、関係機関と連携して適切な維持管理を行います。

<参考>ダム洪水調節地内(ダム上流域)の河床高・河床変動高の経年変化(10年後～100年後)



107mのダムを河川に建設すると、湛水域及び下流全体、さらに海にまで深刻な悪影響をもたらすことは、過去のダム建設でも自明のことである。

その影響は湛水域での自然環境の破壊、道路やトンネルを含む生活環境への危険、ダム建設による河川破壊、自然環境、社会的環境に著しい悪影響をもたらす。

アセスの範囲を限定したこと自体が杜撰な計画である。
事業計画そのものを白紙にすべし。

流水型ダム建設は以下の理由により目的とはならない

球磨川流域においては下流域の支流ほど、豪雨災害は甚大化している。これは球磨川流域の自然の特性を反映したものである。

具体的な例は、時に多くの命が犠牲になった人吉市街地や渡地区において見ることが出来る。山田川・万江川・小川の流域に降った猛烈な豪雨が激甚化して洪水を発生させた。この洪水の氾濫は単なる浸水ではなく、土地の成り立ちを反映した激流と急激な増水が発生させた。

各支流の氾濫の仕方を解析すれば、そこにバックウォーターなどという現象などは存在しないことは明白。

山田川の氾濫で亡くなられた時刻は7時、それから1時間後、大柿地区の方が球磨川の橋を渡って避難しておられる。山田川の氾濫は山田川に施された治水が引き起こしたものである。ダムで下流域の人災は防げない。

国交省要約書 事業の目的及び内容 2-1

2.3事業の目的

球磨川流域における洪水被害の防止・軽減を目的とする

ダムで命を脅かす洪水をカットすることは出来ない

国は川辺川ダムがあれば球磨川の上流域から下流域までピーク流量をどれだけカット出来るかをもっともらしく説明している。

ところが、球磨川においては下流域ほど命を脅かす洪水は早く発生しており、この洪水で命を落とされているのだ。ピーク流量とは全く関係のない、ピーク流量の発生時刻より遥かの早い時刻に発生している洪水である。

このような事態が発生するのは球磨川流域の自然の特性の当然の帰結である。この事実を無視し、流域治水の名の基に川辺川ダムを持ち出しているのだ。2020年球磨川流域豪雨災害を正しく認識しておれば、川辺川ダムなど顔をのぞかせる余地などは片鱗もない。

ダムと堤防で洪水を制御する治水の安全神話は完全に消えた

2020年7月豪雨の際人吉及び球磨村で避難が遅れ、命が脅かされる事態に直面させられた多くの方の意識は治水の安全神話を信じていたことにあった。堤防完備で氾濫域に家を建てた人がどれほど多くおられたことか。

また、この12年間、国と県は昭和40年水害にしがみつき、川辺川ダムの代替案づくりにあけくれ、過去に2度も発生した九州北豪雨を念頭においた対策は蚊帳の外に置いていた。これは、流域住民の意識を昭和40年水害に留めさせてしまう大きな要因にもなった。

想定を超える洪水に対して地域の住民は、超過放流の事実を体験し、ダムが災害を助長する凶器へと変貌することを熟知している。

国は2020年球磨川流域豪雨災害の実態を正しく検証すれば、川辺川ダムを柱とする治水対策を見直すはずである。

環境への影響の最小化を目指すこととしている

最小化という抽象的な表現には科学的根拠がない。

川辺川の流水型ダムに適した環境保全措置や配慮事項の検討を行うという文言が数多くみられるが、流水型ダムの建設自体が自然、社会環境の壊滅的破壊を招くことは、これまでの日本のダム建設による被害の実態を検証すれば明らかである。

まずこれまでのダムによる自然、社会環境の破壊の実態を調査、検討するべきであり、その事実を流域住民に公表したのちに、建設の是非を検討する場を設置すべきである。

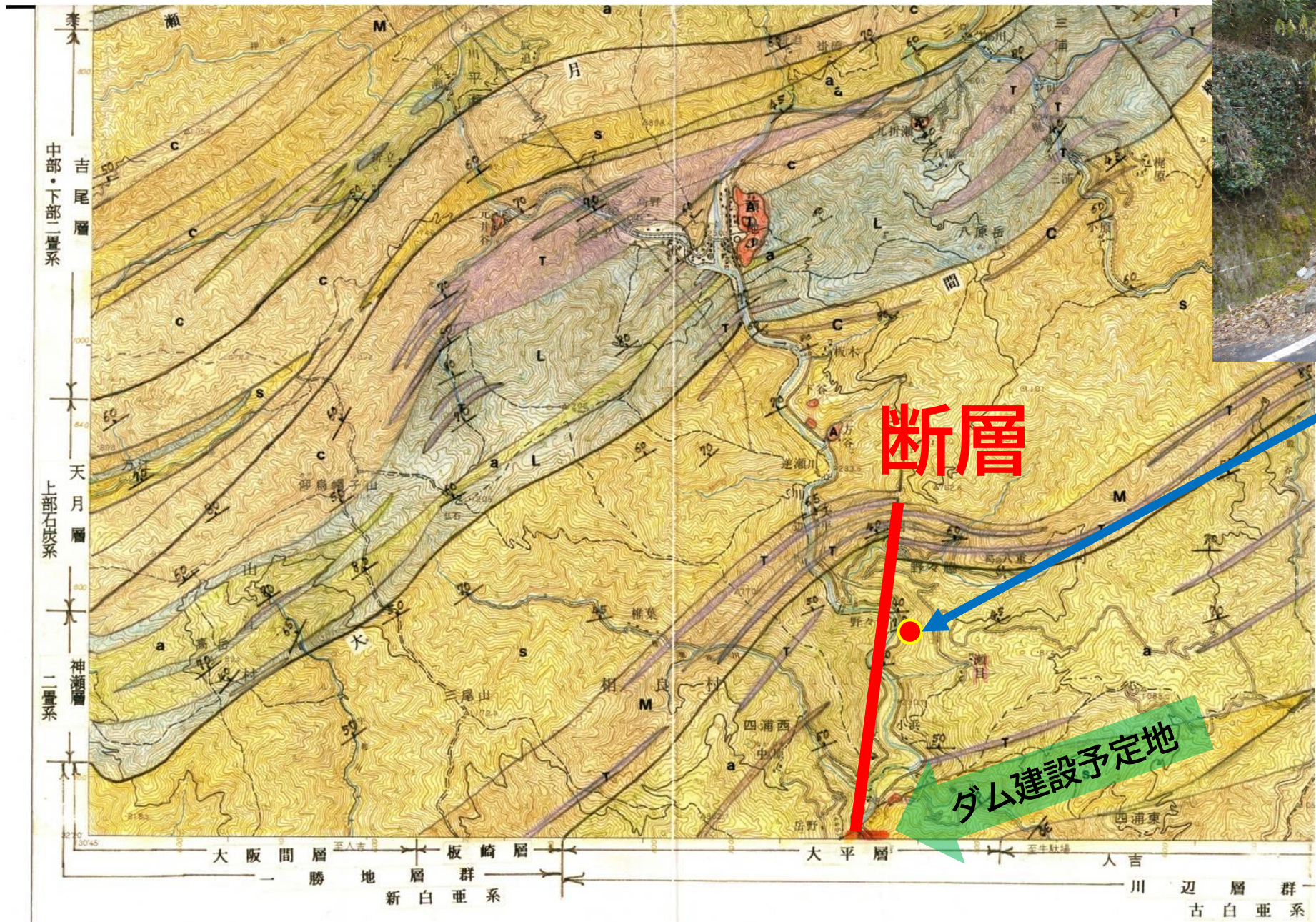
地形及び地質について

重要な地形、地質について

重要な地形、及び地質について調査、予測を実施し事業の実施による重要な地形及び地質の改変は無いと予測した。また、直接改変以外の影響も想定されない。

これにより、重要な地形、及び地質に係る環境影響が事業者により実行可能な範囲内でできる限り回避又は低減されていると判断する

斜面崩壊写真 破碎帯 断層



瀬目トンネル直下の様子

断層

ダム建設予定地

手渡す会資料

地学的問題点として、構造物であるダム本体の安全性や、ダム湛水地の問題、道路等の斜面の軟弱化、斜面崩壊などの危険性を考慮しなければならない。

然るに、今回の調査では予測対象地域がほとんど欠落している。また、直接改変以外の影響は想定されないとしているが、その根拠が全く示されていない。

ダム湛水地およびダム下流の地形の改変について十分に調査するべきである。

ダムサイト予定地上部の地滑り地域の問題

ダムサイト予定地右岸の高所（岳野地区）は地滑り地帯である。ダム建設・ダム貯水などにより、この地滑り地帯に危険な影響を与える恐れが十分に考えられる。

現在この地区では、排水用の井戸が複数存在し、常時水を抜いている状態である。この問題についての見解が一切ないことは重大な問題であり、しっかりと調査報告されるべきである。

頭地地区の地質の問題

この地区を形成している泥は全て霧島・阿蘇火山から飛来してきた火山灰である。この火山灰層の下部は、阿蘇火砕流堆積物で占められている。この粘土を伴う地質は緩く川辺川方向に傾斜している。

ダムが完成し湛水されると、火砕流堆積物の粘土が存在する部分は完全に水面下になる。数多くの地滑りや、斜面崩壊の大きな原因のひとつは、粘土が含水したため粘着力を失い、また、滑性を増加したことが理由になっている。

斜面崩壊による頭地地区への影響は深刻なものであると考えられる。このような危険な場所が存在する地域にダム建設をしてはいけない。

手渡す会資料より

湛水区域内の斜面崩壊の問題

ダムが完成し貯水されれば、長年自然状態にあった河川水面と全く異なる水面となり、水没する樹木の枯死・腐敗により樹木の根などで安定が保たれていた部分は崩壊されやすく変化する。

また、ダム湖の水は貯水・放流により水位を変動させる。放流による急激な水圧低下の物理的運動や、水位変化に伴う酸化帯・還元帯の交互変化による化学作用に伴う風化促進作用などのため、ダム完成後ある期間中にはしばしば斜面崩壊がおこっている。**湛水区域内には小規模断層・スランプ構造・破碎帯のケースがみられる。斜面崩壊の危険がある区域について、評価レポートにその点が存在しない。**

地質学教授の松本幡郎先生の調査によると、**ダム貯水地内の斜面崩壊の危険がある区域は47カ所ほど存在している**。それらの区域を綿密に調査されるべきである。

結論

国の分析は恣意的で、杜撰。
公共の利益につながる事業ではない。

ダム建設に都合のいい分析だけで、
責任を取らない、事業遂行に異を唱えない
曲学阿世の学識経験者からの意見のみを反映

川辺川ダムは地域を不幸にする事業である。
起業者は、
能力を有するものであるとは認められない。